

第4章 特論

1. 寺と山城

飯沼 賢司
別府大学教授

朝鮮式山城から山岳寺院へ

古来、寺と山城は密接な関係をもっている。663年、白村江の戦いで新羅・唐の連合軍に破れた日本側は、大宰府を整備し、その防備を固めるため、水城や朝鮮式山城や烽火(狼煙台)などを設置した。大宰府のすぐ北裏に位置する大野城は、百濟から亡命した貴族の指導の下で造られた新しい城であった。山頂部を土塁で囲み、谷にも石塁を築き、城壁のような構造を持たせ、その中に倉庫などさまざまな施設が置かれていた。山などを神の住む恐ろしい場所としてみてきた日本人には、このような山城の発想は新しいものであった。そのため、新羅との緊張はそれから200数十年維持されるが、大野城の機能は永くは続かなかった。

山城としての大野城に替わって新たに設置されたのは寺院であった。大野城の山は四王寺山と呼ばれている。これは、宝亀5年(774)3月に新羅が日本に対して、毒心を懷き、常に呪咀を為すため、「高顯淨地」に災い攘却のために四天王寺を造り、四軀の四天王像を安置したところから起こった名前である(『類聚三代格』)。天平宝字のころ、新羅と日本は一触即発の状態となり、その後、新羅船などの到着する度に緊張が走った。この四王寺の設置もそのような緊張の結果であり、宝亀5年(774)から律令制府は漂着新羅人は放還するという方針に転換した。この緊張は、大野城の補修や整備という方向には向かわず、新羅の呪咀から国土を護る方法として仏教を前面に登場させることになった。

新羅との関係は、九世紀に入ると一段と悪くなり、新羅船が海賊行為に及んだり、国内での新羅人の反乱事件などを契機に悪化の一途をたどった。このような事態は、城の整備ではなく、宝亀五年からの流れを受けて寺の設置によって新羅の脅威に対処する方向に進んだ。貞観9年(867)5月26日には、八幅の四天王像がそれぞれ伯耆、出雲、石見、隠岐、長門に五箇所に配布された。これらの国は西極の地にあり、新羅国と近く、他国とは異なり、特別な警備が必要であった。大宰府の四王寺と同じく、新羅の賊心を調伏するため、尊像の前で僧4人が最勝王經四天王護国品を昼夜転読することになった。(『三代実録』)。

これらの四天王の安置された場所は、「須く地勢高敞にして賊境を瞰瞰す道場を点訳すべし」とあり、高地であり、新羅の国の動きを監視できる場所が選ばれた。石見、隠岐の寺跡は確認できないが、伯耆は倉吉市四王寺山、出雲は松江市山代町、長門は山口県下関市にそれぞれ四王寺の遺跡があり、烽火が置かれるような見晴らしのよい山の上に設置されている。平安時代、軍事的脅威が存在しても古代の軍事的施設は整備、強化される方向には進まず、宗教的施設へ転換していった。

大分県では、古代の烽火が置かれた場所として高崎山や玖珠の伐株山などが想定されているが、ここにも、平安時代以降、神社や寺院などの宗教施設が置かれてゆく。玖珠の伐株山には、「高消寺」「高勝寺」という寺院があった。この寺の設置時期は不明であるが、平安まで遡る寺院と思われる。また、高崎山には、天台僧金亀和尚によって天長四年(827)に由原八幡宮が創建される。由原八幡宮の創建理由は「四海擁護」のためとされ、瀬戸内海に出没した新羅海賊などの脅威と関連したものと思われる。

奈良時代までは、神は人々に災害をもたらす脅威の存在として、それに近づけば人を殺すと恐れられていた(『風土記』)。平安時代、神仏習合が展開してゆく中で、山々に鎮座した自然の神々は、人間世界の中に取り込まれ、神の住む山にも多くの寺院が建立され、恐ろしい、大魔所は浄土の世界に変わってゆく。しかし、そのような理念とは別に、平安時代の後期にはいと、寺社は多くの荘園などを抱える権門勢力として、みずから僧兵などをかかえ、寺院そのものが現実の武力の拠点としての機能するようになった。殊に山岳寺院は、観念的な宗教上の砦だけではなく、現実の城としての役割を見せ始めるようになる。それでもまだ神域や仏域を犯して、武家勢力が山に入ることはめったになかった。

寺院の城塞化

しかし、14世紀以降になると、寺院が城として現実の戦いの戦場となるケースが急激に増加した。たとえば、玖珠の郡名の由来となった楠の巨木の切株といわれた伐株山の城はその典型であった。南北朝時代、この山の頂上にあった城は「玖珠城」「高消寺」「光勝寺」「光勝寺之城」などと呼ばれた。玖珠城には南朝方の勢力が籠もり、豊後の南朝方の拠点として大友惣領家の率いる北朝方と攻防を続けていた。

建武3年(1336)7月28日の植田寂円軍忠状には、「豊後国球珠郡高消寺凶徒のうち、敷戸孫三郎入道普練、賀来弁阿闍梨、孫五郎以下の輩、当城を忍び出し、同国靈山寺に楯籠り、当山衆徒等と相語らい、今月廿五日、植田大輔房有快之館に押し寄せ、数十の在家を焼き払う【原漢文】とあり、玖珠城の南朝方が城を抜け出し、大分郡の靈山寺に入り、そこから山下の植田荘の地頭である植田有快の館を攻撃した。

この史料では、玖珠城のことを「高消寺」といい、他の史料では「光勝寺之城」ともいい、寺そのものが城であった。数戸普練らが楯籠もった霊山寺もまた天台宗の山岳寺院であり、寺と山城は同じ立地にあり、城と寺院という二つの顔をもっていた。このように、南北朝時代から山城の時代が本格的に始まるが、この時代の初期の山城の多くが寺の場所に置かれたり、寺と密接な関係をもちなが登場したことに注目する必要がある。しかも、それまでの寺院が武力を所持したという段階から、宗教勢力でない一般の武士が宗教勢力と一緒に、寺院を城塞として使用するようになっている点も新しい展開である。



伐株山城遠景

大友氏の山城であった高崎山城もその中腹に由原八幡宮があり、先にも述べたように、城と宗教施設は深い結びつきをもっていた。国東の山々でも天台山岳寺院の六郷山に関係して、鞍懸城や華岳城のような山城が築かれた。鞍懸城は六郷山の寺院のひとつ鞍懸山の場所にあった城と思われる。当時、六郷山を統括する六郷執行（僧侶）は北朝方に付き、国東の都甲氏などの在地武士は、六郷山の執行の手に所属し、鞍懸城に入り、南朝方と奮戦していた（4月5日付大友氏継感状案、康安2年10月22日付九州探題斯波氏経御教書／都甲文書）。南北朝の動乱の中では、宗教勢力が武家と同様に戦いの最前戦に立ち、在地武士を巻き込んで、寺そのものが城として機能するようになった。

山香町と宇佐市との境界に位置する華岳城は、南朝方が豊前と豊後の道を遮断するために設けた城である。この城のすぐ南には六郷山の津波戸山があり、その東北には鞍懸城があった。南朝方の華岳城の設置はこのような六郷山の寺院勢力、しいては、六郷執行の下に組織された国東の武士の分断をねらったものと思われる。このような城の登場は、山岳寺院などの宗教勢力の手にあった山の支配に武家側が参入することであり、前代まではほとんど見られなかった新たな展開であった。

戦国の山城の意義

戦国時代はまさに山城の時代であった。日本各所の山にはさまざまな山城が築かれ、それまで、寺院や神社が独占してきた山の世界はさまざまな階層の人々の入り込む世界へと変化していった。それは、人々の開発が山へ入り、その利用がついに頂上に到達したという見方ができるのである。

鎌倉時代、武家勢力は、山野に狩倉という演習場を設定し、そこを梃子に山野支配を目指そうとしたが、いまだ山野には寺社の強い支配が存在し、国東半島でも奥の山間地にある天台六郷山寺院と谷の入口にある荘園と地頭とが山野の「畑」（焼畑）をめぐるしばしば衝突を繰り返していた。在地領主は狩倉と称して、山野を焼き、実際には畑を切り開いた（松平島原文庫所蔵文書）。しかし、この段階では、山の頂部の支配は、在地領主の手には入っていなかった。

ところが、南北朝期に入ると、動乱の中で、先にも述べたように、山岳寺院を城郭として利用することがしばしば行われるようになった。聖域であった山の世界に麓の俗人たちが踏み込んだのである。この時代から、山への俗人たちの開発は急速に広がっていた。里山と呼ばれる村の近辺の山々は焼かれ、採草や放牧や焼畑として利用され、樹木のない裸山の景観が一般化していったと思われる。里の人々の山への利用度は飛躍的に高まり、山の尾根道など頻繁に利用された。

山城の増加は、戦国時代の不断の戦争状態が原因と説明されがちであるが、在地領主の支配の点からみると、開発の結果、山を支配する重要性が高まり、それ故に、里を支配する拠点として山城が設けられたといえるのである。

戦国時代の山城は、領主の山城だけではなく、村持ち山城が史料に登場する。城は、決して領主だけのものではなく、山を支配する村もまた山に城を築き、他の村や領主の力に対抗したのである。